

森脇 健介

MORIWAKI Kensuke

《書評》

アンドリュー・サリヴァン著、本山哲人、脇田玲子監訳、板津木綿子、加藤健太訳

『同性愛と同性婚の政治学—ノーマルの虚像』（明石書店、2015 年）

Dōseiai to dōseikon no seijigaku: Nōmaru no kyo zō (Virtually Normal: An Argument About Homosexuality). By Andrew Sullivan. Edited by Motoyama Tetsuhito and Wakita Reiko. Translated by Itatsu Yūko and Katō Kenta. Akashi Shoten, 2015.

「愛というのは本当の気持ちを抑圧することでのみ受け入れてもらえる」（「プロローグ」17 頁）、著者アンドリュー・サリヴァンの幼年時代に対するこのシンプルな叙述から、異性愛を中心に構成されている社会の矛盾が直ちに露呈する。他者への恋愛感情が、同性愛においては隠すことから、すなわち「ノーマルの虚像」をまとうことから始まる。愛は解放ではなく抑圧であり、悦びでなく新たな苦しみの始まりであることを強いられる、このダブル・スタンダードが個人の心的体験を超えて社会制度にまで貫徹しているのが、近年までの多くの国々における状況であった。経済先進国を中心としたゲイ・ムーブメントは、性愛を既成道徳から解放し、その試みは諸国での同性婚の法制化にまで進んでいる。2001 年のオランダを端緒として、2015 年 5 月 22 日には、カトリック国であるアイルランドでも同性婚の法制化が国民投票により可決された。同年 6 月 26 日には、ついにアメリカでも連邦最高裁判決（*Obergefell v. Hodges* 事件）により、同性婚が合衆国憲法上の権利として宣言された。こうした流れの淵源をたどり、90 年代のアメリカにおける同性愛をめぐる議論に大きな一石を投じたのが、本書（1995 年初版）である。

本書を読み解くうえで理解しておかなければならないのが、サリヴァンの複雑な思想的立ち位置である。まず、彼はゲイを公言しているアメリカの著名な政治

評論家である。一方で彼は敬虔なカトリックであり、「保守主義の父」エドモント・バークに傾倒する彼の思想は、実は保守に原点がある（「監訳者あとがき」286頁）。そのような著者が、同性婚擁護の論陣をいかにして張るのか。本書の構成にも通じるが、同性婚をめぐるあらゆる思想を各章で批判的に検討して後に、新たな「同性愛の政治学」を構築する、これが彼の採ったメソッドとなっている。批判対象となるのは、キリスト教勢力を中心とした「同性愛禁止論者」、フーコー主義者・社会構築論者を中心とする「性解放論者」、そして彼自身の原点である「保守派」、最後に万人の法的平等を主張する「リベラル派」である。

「同性婚禁止論者」に対してサリヴァンが採る態度は厳しく、神学的「自然」を振りかざす教義は、もはや「世俗的政治体制のなかで」、「修辞学的な言葉の羅列でしかなく」、「一般に理解されている政治的理念にとって全く意味を持たない」（75頁）という。一方で著者はカトリック教徒の一人として、信仰と同性愛の関わり方に新しい可能性も見出しており興味深い。すなわち、「神の創造の多様性」を受け容れ、自然界の全ての存在に目的がある（まさにトマス神学のフィニス論を想起させる）と捉える新潮流こそが、カトリック教会が選びうる発展の道と示唆されている（68頁）。彼の期待は今や、同性愛に寛容姿勢を示すフランシスコ教皇の主導の下で、現在、カトリック内部から実現され始めていることを見ると、その先見の明には驚かざるを得ない。

二番目の立場である「性解放論者」の主張は、より同性愛の政治に親和的であるように思われるが、サリヴァンの批判は禁止論同様に厳しい。性解放論者の歴史的意義としては、既存の普遍に異を唱え、社会規範の多くが単に権力の構築物に過ぎなかったことを、特にセクシュアリティの領域で明らかにしてきたことが挙げられる。もちろんサリヴァンもこうした功績は認めている。しかし彼は、性解放論における本質的な自然は存在しないという立場は、結局、同性愛という自然的本性もまた存在しないとすることで同性愛者のアイデンティティを否定してしまうのだと批判する。脱本質主義はこの意味で、禁止論とは同軸における対照なのである。

サリヴァンがこうした立場の思想的原点として重視するのはフーコーであり、

言わずと知れた彼の性／権力論への批判が、上記のような性解放論者の主張への異議となっている。たとえ「ゲイ」というアイデンティティを構築したとしても、それはある権力の言説から別の権力の言説支配下へと移行したに過ぎない。セクシュアリティを人間のアイデンティティの基盤に据える以上、その「烙印」化は免れず権力への抵抗にはならない。まさにそのセクシュアリティという概念自体が、覆されなければならない。ここからドラッグ・クイーンなどのパロディを通じて、既成規範を相対化させる試みが生じてくる。クィアとはまさに、セクシュアル・アイデンティティの本質化を否定する自称である。

しかしサリヴァンはこの抵抗の実践の中にこそ実は、社会・文化と独立した「個人の本質的な一面」が存在しているのだと主張する。「自由意思というのはしづといものである」（100 頁）。サリヴァンは人間の根源としての自由意思、そしてその中核にある愛こそが、社会を形成する基礎であり、抑圧するものに対しての抵抗の本拠となるという。

脱本質主義の行きすぎは逆に絶対的権力への抵抗の基盤を揺るがずとし、「自由な意思を持つ個人」という出発点を放棄しないサリヴァンの立場は、まさに近代西洋思想の中核であり、サリヴァンの保守性を示すものといってよい。こうした「自由な個人」像が現在、ポストモダニズムに代表される様々な現代思想から批判にさらされていることは、言うまでもない。しかしサリヴァンにおいては、権力に対峙する個人としての立脚点まで解体しては、まさに「産湯とともに赤子も流す」に等しいと見えるのだろう。

実際にこうした本末転倒が端的に表れるのが、まさに同性婚をめぐる政治闘争であるとサリヴァンは主張する。つまり性解放論者の中には、これを同性愛者への抑圧だけを強調し、人種や障害問題など他の社会的抑圧を隠蔽するよう機能するとし、しかも同性婚の法制化はそうした他集団の犠牲の上で、別の新たな権力関係に同性愛の問題を移行させるだけであると主張する者もいる。しかし、解体の無限螺旋は結局、現実社会を変革しないまま、周縁を回り続けるだけであるとも言える。「ノーマルな者が主権を握らなければ、クィアは存在できない」のであり、「クィア文化による反乱を平等と許容の政治思想と結びつけることで、クィア

の政治理念は自己崩壊する」(121 頁)。すなわち性解放論は、「内在するニヒリズムによって自己破壊が起きてしまう」(125 頁) のだという。

三番目の立場、「保守派」について、彼の定義する保守思想は、言うなればアメリカ建国史を貫く政治的保守主義である。その思想とは、「自由主義国家の前提となっている自由や多元主義や言論と行動の自由は保障されるべきだと信じているが、その一方で、政治は、ある種の文化的、社会的、道徳的価値を打ち出していく場でもある」と信じる立場のことだ(128 頁)。言い換えればこうした保守思想は、私的領域における国家権力からの自由と、公的領域における何らかの価値の維持を主張する立場である。従ってもし私的領域における自由な個人を擁護するならば、同性愛擁護はむしろ当然の帰結であるとすら言えるはずだ。

ところが結局のところ、政治的保守派の思想は、同性愛の(しぶしぶの)私的許容と公的否定のセット＝同性婚の反対というかたちで主張されることが多い。問題の公的価値の維持という点において、彼らは同性愛を家庭価値に反するなどの理由で、最終的に否定するのである。

しかし、保守派の立場は破綻しつつある。家庭価値の毀損を同性愛反対の論拠とすることは、家庭と同性愛者を二項対立的に捉える発想に基づく。しかし同性愛者は兄弟姉妹や子として、元より家庭の中で生きている。保守派の批判はまさにこうした既存の家庭を破壊する言いがかりでしかない。そして、私的生活というゲッターに留まる限り同性愛を黙認するという保守派の「契約」的前提もまた、カミング・アウト運動を通じて揺らいでいる。公的な場で「語らない」という建前は崩れ、同性愛者の公的空間における遍在は今や明らかである。私的領域と公的領域に分断されていたアイデンティティは、すでに統合を開始している。

サリヴァンによれば、今や保守派は二つの道を選ばねばならない。「同性愛者に対して、反感を買うような拒絶をさらに示し続けて孤立していくのか」、あるいは「同性愛者の保守的な側面に歩み寄り、責任感のある真つ当なゲイ市民と連携していくのか」である(171 頁)。前者の道は宗教勢力との結託以外にない袋小路であり、他方で後者の道は、サリヴァンの保守性が感じられるアドバイスであるが、ゲイ市民に対し「新たな社会的責任」を持つよう積極的に働きかけることにある

とされる。いずれにせよ、旧来の保守派が前提としてきた公的排除と私的寛容という二元論は、「もはや政策的に不適切で、道德面において愚鈍な様相を呈してきた。つまり、この議論は、ゲーム・オーバーが近いのかもしれない」（172 頁）。そして、この予言は現実のものとなった。すなわちその宣告を下したのが、2015 年の合衆国最高裁判決であると言えるだろう。

「リベラル派」に対するサリヴァンの立場は、比較的肯定的である。全ての人に法の下での平等な自由を実現すべきというリベラル派の伝統的主張は、ソドミー法廃止の論陣をはじめとして同性愛者だけでなく、様々な社会的マイノリティがマジョリティへと対抗するための政治的基盤を与えたと評価される。しかし、サリヴァンはリベラル派ではない。共感を持ちつつも、リベラル派に対する批判は冷静である。その批判は、主に二つの点に向けられている。

一つは、差別禁止法の制定要求に見られるような、個人の私的領域にまで立ち入って、徹底的に差別を禁止しようとする姿勢である。サリヴァンはこれを「一部の者の自由に制約を設けることで、他の者の自由を拡大する」という「矛盾」と指摘している（185 頁）。そもそも本来のリベラル派の理念は、国家権力の行使を制限し一定道德の樹立を禁止することにあつたのではなかったか。「自由主義の社会では、国家から特定の道德観を押し付けられずに済むという権利」は、「全市民の権利」だったはずだ（208 頁）。

そしてもう一つの批判は、反差別のリベラル派の主張が、マイノリティのアイデンティティの擁護という点であまりに「大雑把」であるという指摘である。リベラル派にとって、同性愛擁護の主張は、あたかも公民権法における法の下での保護に、性的指向という用語を付け加えるだけのもののようだとサリヴァンはいう（191 頁）。ところが、同性愛は人種等の定義よりはるかに外的徴表からは不確かであり、内的にも多層である。「何が同性愛か」。法的に保護する試みは、同性愛の法的定義の困難性という問題に直ちにぶつからねばならない。そもそも性的指向は、文化的・生物学的特徴に加え、行動によっても示されるという特徴をもつ（207 頁）。つまり差別禁止は、同性愛を個人的価値観から忌まわしいものとする人々に対し、その行為をも許容せよという過剰な道德的命令となる。これは彼

らに対し、やはり「自由主義的な社会の道徳的中立性をあからさまに侵害するもの」として、国家権力による市民的自由の制限に帰結してしまう（208頁）。

サリヴァンは以上のように、リベラル派の解決策は、容易ではない問題を容易に片付けようとする手法であり、リベラル派自身の自己矛盾も広げる危うい方策として認識している。そうしたリベラル派に対するサリヴァンの助言は、リベラル主義的中立性を妥協してはならない、というものだ。「政治的理念は、個々人の生き方によって成し遂げるべき成果をもたらすことはできない。個々人の生き方に託された課題は、個々人の生き方によってのみ成果が得られるのである」（216頁）。

それでは、サリヴァン流の同性愛の政治学は、どのように構築することができるのか。サリヴァンは、「リベラル派と保守派の長所を融和させ、一つにすることができるとする政治的立場」としてそれを提案する（218頁）。その中核にあるのは、やはり個人の自由の尊重という自由主義社会における保守の理念である。すなわち、同性愛者に対する（私的ではなく）公的差別の撤廃、つまり完全な市民権と責任を認めることである。国家は積極的な同性愛容認を政治的に強要してはならず、あくまで中立的でなくてはならない。公的領域における平等の達成についてはリベラルに、そして私的空間における自由の尊重については保守的に、これがサリヴァンにおける保守とリベラルの止揚態である。その具体的な法的措置としては、反ソドミー法の撤廃や、異性愛教育と差異がない程度の同性愛教育の付与、そして政府機関や軍などの公的組織における雇用差別の禁止などが挙げられる（220頁）。

この中にあって、サリヴァンが最も中心的な課題として位置付けているのが、婚姻の平等の達成である。「結婚は、私的なものである道義心に、公的に最高の評価を与える手段」であり、「単なる私的契約ではない」（229頁）。すなわち、中立的な自由主義国家において、同性愛者に対し市民権としての婚姻権が閉ざされる理由はない。婚姻が異性間でなされねばならない場合とは、それが生殖活動の一環として捉えられる場合のみである。しかしそのような結婚観は、西洋社会ではすでに放棄され始めている。そうすると婚姻には、「一組の人間の感情的、経済的、

精神的な絆」を基にした公的契約という本質のみが残る（229 頁）。ここに、セクシュアリティの相違は問題とならない。むしろ婚姻を通じ、誰かと一生を共にするという道義心を育成し、後続の同性愛者への模範を示すことで、同性婚は社会的に有益ですらあるという。これが、サリヴァンの結論である。

さて、読者からすればいくつかの批判は「言いがかり」として映るものもあるかもしれない。特に性解放論者への批判は、相当に原理的な構築主義が論難のモデルとなっている。リベラル派の差別禁止法政策への批判に対しても、これは「私的なものは政治的である」という発想のない、近代的公私二元論を堅持する立場からの批判に終始したものと映るかもしれない。特にこの点でサリヴァンの立場ははっきりしており、「平等を明確かつ公的に掲げつつも、感情や情熱から生じる不平等は私的領域に収めてしかるべきだと考える政治的立場」こそが、「同性愛者が自分自身の将来やアイデンティティを定義づけ、他の者の手に委ねないようにする」ために必要な措置であると理解している（237 頁）。そして実際に本書刊行後にそうした批判が寄せられたわけであるが、「おわりに」において、サリヴァンはこうした公私の区別について考えを改めるつもりはないと断言している。公的領域を占める価値がリベラルであり続けるためには、公的哲学としてのリベラル主義自体の理論的首尾一貫性が必要と考えているからである（272 頁）。そしてこの背景には当然、保守思想における私的領域の自由の尊重もまた動機として挙げられるだろう。

原著の出版から 20 年の時を経て、アメリカにおける同性愛をめぐる法政策は、「監訳者あとがき」において示されるように、実際にサリヴァン流の公私二元論を軸に展開してきた。公的領域においては同性婚の法制化、軍における Don't Ask Don't Tell 規定（同性愛公言禁止規定）の撤廃など、そして私的領域では宗教的信条を理由とする特定集団へのサービス拒否の自由を認める宗教的自由回復法案（Religious Freedom Bill）の作成などが例として挙げられる。監訳者も指摘するように、サリヴァンの功績は、後続の議論へとつながる土壌を育んだ、まさに「議論を生んだ」ことにあると言ってよいだろう（290 頁）。そのため本書は、サリヴァンの思想を理論的・哲学的に検討するための素材という以上に、こうした公私

二元論が実際の歴史においてどう帰結したかという思想史的考察の対象として一層の意義をもつものと思われる。

ちょうど訳本の刊行年となった 2015 年 3 月 31 日、渋谷区においてパートナーシップ条例が可決された。このパートナーシップ契約によって付与される公的利益はごく限定的なものではあっても、日本でも同性婚の法制化へのオープンな議論が、その端緒を切り開かれたのである。サリヴァンの議論を参照すると、同性婚の法制化は、市民的平等の達成のためにあらゆる意味において欠かせないものとして位置づけられている。婚姻は言うなれば、公的領域における平等の達成だけでなく、私的領域におけるアイデンティティ形成とも深く関わるものだからだ。もちろん、婚姻という制度自体に懐疑的な論者からすれば、同性婚はサリヴァンが言うところの性解放論者風に、新たな権力関係への移行であって、今度は同性愛者をも巻き込んだ「婚姻／非婚姻」という新たな二項対立を再生産するだけだという批判も寄せられるかもしれない。この点、サリヴァンの結論は明確である。「ゲイもレズビアンも、結婚制度を拒否などできない。なぜならそもそもその制度を与えられたことがないからである。政治的平等は、真の文化的他者性を脅かすものではなく、ゲイやレズビアンの他者性が成立するための前提条件なのである」(266 頁)。

近年、欧米のインターネットの世界では、「パンセクシュアル (pansexual)」という語が散見される。これは、性的指向の対象に一切の限定がない(異性・同性という区分でそもそも他者を見ていない) 人々の自称である。この語は、私達に新しい性的指向の分類を示唆してくれる。すなわち、人々の性的指向を、同性・異性という対象の「属性」によって分類するのではなく、対象の「数」によって分類するという観点である。このように考えると、異性しか愛さない人も同性しか愛さない人も、双方は敢えて言うなら「モノセクシュアル (monosexual)」とでも定義できる人々で、実は両者はそう遠くない地平にいるのかもしれない。実際、人々の歴史的文化的な性実践(特に近代以前の)を鑑みれば、性的指向の対象の複数性により、バイセクシュアル(2つの性が対象)、マルチセクシュアル(3つ以上の性が対象)、パンセクシュアル(性の対象区分が存在しない)、そして性

的指向対象自体が存在しないアセクシュアルとでも分類する方が、合理的ではないか。

そしてこのような分類を想像してみると、同性婚をめぐる議論は、モノセクシュアルの人々を中心としたヘゲモニー闘争という様相を帯びてくる。要するに現今の社会構造とは、セクシュアリティの複数性を否定するモノ・ヘテロセクシュアリティによる専制支配のようなものだ。市民権拡張の歴史が説くように、こうした閉鎖的支配体制を覆すには、市民権の順次解放、すなわちまずは第二のマジョリティとすらいえる同性愛者の婚姻権を実現するのが順当だろう。しかし日本の場合は、政治的意思形成を行うアリーナにサリヴァン流の保守派がそもそも寡少などころか、むしろ私的領域すらもまた国家＝公的空間によって支配されるべきとでもいうような言説が、いわゆる日本的保守の説論として見受けられる。サリヴァンが自明の前提としている個人の自由の尊重という根本理念の共有こそが、実は討議を始めるにあたっての喫緊の課題なのかもしれない。